

イザヤ書36-37章「敵の声に打ち勝つ」

1A 主への信頼に対する中傷 36

1B 王の献身に対する悪口 1-10

1C 二度目の挑戦 1-3

2C 肉の弱さへの攻撃 4-10

2B 民の引き離し作戦 11-22

1C 信仰に代わる物の供給 11-17

2C 主を神々と一つにする冒瀆 18-22

2A けりをつける万軍の主 37

1B 脅しに苦しむヒゼキヤ 1-13

1C 祈りの要請 1-4

2C 救いの始まり 5-7

3C だめ押しをするアッシリア王 8-13

2B アッシリアからの救い 14-35

1C 手紙を開くヒゼキヤ 14-20

2C 聖なる方へのそしり 21-29

3C エルサレムの守り 30-35

3B そしりに対する報い 36-38

本文

イザヤ書 36 章を開いてください。私たちはついに、前半の預言の部分を前回読み終えるができました。36 章と 37 章は、それらの預言の背後にあった歴史的な出来事です。主にこそ救いがあることを、前半部分は語ってきました。その背後にあったのは、ユダ国がアッシリアに倒されて、残るはエルサレムだけになりましたが、主が速やかにアッシリア軍を滅ぼし、エルサレムを救われたところにあります。その歴史的な出来事は、列王記第二、歴代誌第二に書いてありました。おそらくイザヤが書いたものを、列王記と歴代誌の著者がその歴史の記述に取り入れたのでしょう。

主は、その長いイスラエルの歴史の中で、ご自身の壮大な救いについて証しする出来事を置かれています。一つに、出エジプトがありました。もう一つは、ペルシアのキュロス王が、捕らわれのユダの民を解放し、エルサレムに帰還する令を發布したことです。彼らが散らされていたところから帰還することが、主の救いの完成を示しています。そして、エルサレムをアッシリアから救われることも、主がご自身に齒向かう者を倒し、救われることの代表例として、証しを立てます。

この話は、エルサレムを完全に包囲し、ヒゼキヤ王の主への信頼を徹底的に攻撃し、中傷す

るところに集中しています。敵の声をヒゼキヤは聞いてしまっています。しかし、その激しい戦いと心の葛藤を、彼は主の前に心を注ぎだす祈りを献げます。

1A 主への信頼に対する中傷 36

1B 王の献身に対する悪口 1-10

1C 二度目の挑戦 1-3

¹ ヒゼキヤ王の第十四年のことであった。アッシリアの王センナケリブが、ユダのすべての城壁のある町々に攻め上り、これを取った。² アッシリアの王は、ラブ・シャケを大軍とともにラキシユからエルサレムのヒゼキヤ王のところへ送った。ラブ・シャケは布さらしの野への大路にある、上の池の水道のそばに立った。

紀元前 701 年のことです。センナケリブは、地中海沿いに南下し、それから北東にあるユダの町々を倒していきました。そして、南西からエルサレムに近づきました。そして、南南東 50 キロぐらいのところにある、要塞の町ラキシユに王は来ます。そこで何を行なったかは、ニネベで見つかった板の絵の中に出てきます。兵士たちが串刺しにされている姿、皮を剥がされている姿です。その町から、ラブ・シャケをセンナケリブは遣わします。「ラブ・シャケ」というのは、名前ではなく役職の名称です。



そしてラブ・シェケが立ったところは、「布さらしの野への大路にある、上の池の水道のそば」です。ここで思い出していただきたいのは、かつてイザヤが、王アハズに会った時のことです。同じ場所で会っています。「7:3-4 そのとき、【主】はイザヤに言われた。「あなたと、あなたの子シェアル・ヤシュブは、上の池の水道の端、布さらしの野への大路に出向いて行ってアハズに会い、彼に言え。『気を確かに持ち、落ち着いていなさい。恐れてはならない。あなたは、これら二つの煙る木切れの燃えさし、アラムのレツインとレマルヤの子の燃える怒りに、心を弱らせてはならない。』」。しかしアハズはそれを信じられず、アッシリアに援軍を頼みました。この不信仰のゆえ、つけが今、エルサレム包囲にまで及んでいるのです。

¹ https://en.wikipedia.org/wiki/Lachish_relief

これは、心と思いに対する激しい攻撃です。もしかしたら、ラブ・シャケはその過去も知って、同じことをしていたのかもしれませんが。そうでなくとも、ヒゼキヤには自分の父の犯した過ちを思い起こしていたでしょう。

³ ヒルキヤの子である宮廷長官エルヤキム、書記シェブナ、およびアサフの子である史官ヨアフは、彼のところに出て行った。

三人の側近ですが、二人は既に出てきており、対照的でした。シェブナは、世的な人で自分の墓の装飾のことを考えて生きていたような人物です(22:15-19)。エルヤキムは、忠実に主に仕えた人です(20-25 節)。想像するに、おそらくシェブナがエジプトの助けを得る助言をしたのではないか？と思われるます。

2C 肉の弱さへの攻撃 4-10

⁴ ラブ・シャケは彼らに言った。「ヒゼキヤに伝えよ。大王、アッシリアの王がこう言っておられる。『いったい、おまえは何に拠り頼んでいるのか。⁵ 口先だけのことばが、戦略であり戦力だと言うのか。今おまえは、だれに拠り頼んでいるのか。私に反逆しているが。⁶ おまえは、あの傷んだ葦の杖、エジプトに拠り頼んでいるが、それは、それに寄りかかる者の手を刺し貫くだけだ。エジプトの王ファラオは、すべて彼に拠り頼む者にそうするのだ。』

ヒゼキヤの、口先だけの言葉を激しく責めてきました。主に拠り頼めと言っているくせに、エジプトに拠り頼んでいる、という矛盾を付けてきました。私たちの霊の戦いも同じです。敵は、私たちが信仰的に手薄になっているところをよく知っていて猛攻撃していきます。霊の戦いについて、ヤコブは、「神に従い、悪魔に対抗しなさい。(4:7)」と言いました。悪魔に対抗するには、自分が神に従っている領域をくまなく広げていくことが必要なのです。悪魔は、我々の肉の弱さに集中して、猛攻撃をしてくるからです。

⁷ おまえは私に「われわれは、われわれの神、主に拠り頼む」と言う。その主とは、ヒゼキヤがその高き所と祭壇を取り除いて、ユダとエルサレムに「この祭壇の前で拝め」と言った、そういう主ではないか。

ヒゼキヤの行ったのは、抜本的な宗教改革でした。高き所を取り除いたのです。ソロモンが神殿を建てる前までは、イスラエル人たちは高き所で、主に対していけにえを献げていました。しかし、神殿が建てられてからは、そこに主が御名を置くと言われており、そこでのみのいけにえを、主は受け入れられます。モーセの律法の中に、そのことが書かれています。約束の地に入って、ご自身の名が置かれるところでいけにえを献げて、それ以外のところでは献げていけないという戒めです。それは、異教徒もいけにえを献げるからです。そして、自分自身は主に献げていると思いが

ら、心は偶像礼拝と変わらなくなってしまうからです。

アラドという町がユダの地にあります。ソロモンの治世の時以降、要塞の一つとなっていた町でした。その遺跡に、エルサレムとそっくりの、聖所の跡があります。祭壇があり、聖所また至聖所があります。しかし、その至聖所のところに、カナン人の神に祭る柱と、イスラエルの神、主を祭る柱が両方、立っています。自分たちのところで適当に礼拝しようとする、このように偶像との妥協が起こるのです。それを取り除いたのが、ヒゼキヤです。ベエル・シェバには、ヒゼキヤが取り壊した高き所の祭壇の複製が置かれています。

私たちも、イエスが主であると告白しています。父なる神と御子キリストのみを信じています。このことが、排他的と非難されるのです。すべての救いはイエス・キリストのみにある、という言葉や信仰に対して、独善的、排他的に見えるでしょう。けれども、そこにこそ救いがあるのだ、ということ、をイザヤも何度も繰り返して教えてきました。アハズのようにアッシリアに与するのでもなく、エジプトに拠り頼んで反抗するのでもなく、ただシオンに住まわれる主を待ち望むのです。

⁸ さあ今、私の主君、アッシリアの王と賭けをしないか。もし、おまえのほうで乗り手をそろえることができるのなら、おまえに二千頭の馬を与えよう。⁹ おまえは戦車と騎兵のことでエジプトに拠り頼んでいるが、私の主君の最も小さい家来である総督一人さえ追い返せないのだ。

アッシリアの軍事力を誇りましたが、その通りなのです、エジプトも軍事力、馬の数はありましたが、アッシリアのほうがはるかに多かったのです。

¹⁰ 今、私がこの国を滅ぼすために上って来たのは、主を差し置いてのことであろうか。主が私に「この国に攻め上って、これを滅ぼせ」と言われたのだ。』

これが、最も悪辣な、みことばの乱用です。主は、確かにエルサレムに対して、敵による懲らしめがあることを語られました。しかし、滅ぼすためではありません。そして、器たるアッシリアが、自分のしている悪を差し置いて、主の名をみだりに唱えているのです。悪魔が、主を誘惑した時も、みことばを悪用しました。信仰者に対して、悪魔は主の言葉さえ使って、歪曲して、私たちが罪に定めようとするのです。

2B 民の引き離し作戦 11-22

1C 信仰に代わる物の供給 11-17

¹¹ エルヤキムとシェブナとヨアブは、ラブ・シャケに言った。「どうか、しもべたちにはアラム語で話してください。われわれはアラム語が分かりますから。城壁の上にいる民が聞いているところでは、われわれにユダのことばで話さないでください。」

アラム語は、当時の貿易言語です。今でいうと英語のように、その地域で多国間で使用していた言語でした。ダニエル書の2章から7章、異邦人の国々に対する預言はアラム語で書かれています。けれどもラブ・シャケは、ヘブル語を使って話しました。敵の言語を習得するのは、相手を攻撃するのに良い道具になります。ハマスの軍事指導者シンワルは、流暢なヘブル語を話すと言われています。彼がイスラエルの刑務所にいた間に習得したそうです。それで、イスラエルの内部を深い部分まで知り、何をすれば相手を傷つけることができるかを熟知していると言われています。

¹²ラブ・シャケは言った。「私の主君がこれらのことを告げに私を遣わされたのは、おまえの主君や、おまえのためだろうか。むしろ、城壁の上に座っている者たちのためではないか。彼らはおまえたちと一緒に、自分の糞を食らい、自分の尿を飲むようになるのだ。」

当時の城壁は、かなり分厚いものです。幅があるので、人々がそこにまで上がって、ラブ・シャケが語るのも聞いていたようです。ラブ・シャケは、彼らに直接語りかけます。民の心を、王から引き離すためです。彼らにとって切実なのは食糧です。包囲されているので枯渇しています。それで、糞を食らい、尿を飲むようになると脅しています。

¹³ラブ・シャケは突っ立って、ユダのことばで大声で叫んだ。「大王、アッシリアの王のことばを聞け。
¹⁴王はこう言っておられる。『ヒゼキヤにごまかされるな。あれは、おまえたちを救い出すことができないからだ。¹⁵ヒゼキヤは、「主が必ずわれわれを救い出してください。この都は決してアッシリアの王の手に渡されることはない」と言って、おまえたちに主を信頼させようとするが、そうはさせない。』

明確に言っていますね、主に信頼させることはさせない、と。これこそ、敵、悪魔の声です。

¹⁶ヒゼキヤの言うことを聞くな。アッシリアの王がこう言っておられるからだ。『私と和を結び、私に降伏せよ。そうすれば、おまえたちはみな、自分のぶどうと自分のいちじくを食べ、自分の井戸の水を飲めるようになる。¹⁷その後私は来て、おまえたちの国と同じような国におまえたちを連れて行く。そこは穀物と新しいぶどう酒の地、パンとぶどう畑の地である。』

アッシリアは、捕囚の地で穀物、ぶどう酒、パンにあずかることができると言っています。主に拠り頼むという目に見えないことか、それとも目に見える必要を選ぶのか？ということです。目に見えるものは一時的で、目に見えないものこそが永続することを私たちは知っています。しかし悪魔は、目に見えるものに目を留めさせるのです。

2C 主を神々と一つにする冒瀆 18-22

¹⁸ヒゼキヤが、「主はわれわれを救い出してください」と言っても、おまえたちは、そそのかされない

ようにせよ。国々の神々は、それぞれ自分の国をアッシリアの王の手から救い出したらどうか。¹⁹ ハマテやアルパデの神々は今、どこにいるのか。セファルワイムの神々はどこにいるのか。彼らはサマリアを私の手から救い出したか。²⁰ これらの国々のすべての神々のうち、だれが自分たちの国を私の手から救い出したか。主がエルサレムを私の手から救い出せるとでもいうのか。』」

この言葉が主の怒りを引き起こしました。他の国々で拝まれている神々と、ご自身をアッシリアが同列に置いたのです。歴代誌第二では、注釈があります。「32:19 彼らは、人の手のわざである、地上の民の神々について語るのと同じように、エルサレムの神について語ったのである。」

当時の古代世界では、国と国が戦う時に、その国を代表する神々の中の戦いとみなされていました。アッシリアがことごとく、国々を征服した時に、その神々の助けがなく、アッシリアの神が勝ち誇っているとラブ・シャケは言っているのです。同じ発想で、主はエルサレムの神であり、アッシリアの神は、エルサレムの神を余裕で倒せると豪語しているのです。しかし、霊的にはこれこそが、とてつもない冒瀆発言であり、主ご自身がこれに対して御怒りを示されます。主ご自身の栄光を曇らせること、他の被造物と同列に置くこと、それこそが罪の最たるものだからです。

主ご自身の栄光を奪い取る、偶像に私たちは取り囲まれています。それは、地蔵などの像とは限らず、主の与えられたあらゆる良い物を、主と同列に並べることによって、です。主が家族を与えられました。けれども、神を第一とするとときに家族がいるからそれはできない、ということであれば、家族を偶像にしています。安定した仕事があり、主が与えられたのに、主を退けて会社を選ぶなら、その会社が偶像になっています。自分の能力も偶像になりえます。あらゆる貪りは偶像礼拝そのものです。しかし主は、時に、アッシリアのように、これら大切なものが神々ではないことを示されるために、そういったものを無くされます。ある出来事かもしれないし、ある人かもしれないし、ある国かもしれません。そのことを通して、主こそ神であることを明らかにしておられるのです。

しかしアッシリアは、それらの偶像と同じように、エルサレムの神もアッシリアが倒すのだぞ、と言っているのです。主ご自身の栄光を、他の偶像と同じ位置に引き下ろすことを絶えず悪魔は行なっています。「イエス様に従ったところで、他の信じていない人々が頼っているのと同じではないか。」という声であります。イエス様に従うことは、現実逃避しているのではないか、弱い人がすることではないか、というようにその地位と栄光を引き下げようとするのです。しかし、使徒パウロが言いました。「Ⅱコリ 4:4 彼らの場合は、この世の神が、信じていない者たちの思いを暗くし、神のかたちであるキリストの栄光に関わる福音の光を、輝かせないようにしているのです。」

²¹ 人々は黙って、彼に一言も答えなかった。「彼に答えるな」というのが、王の命令だったからである。²² ヒルキヤの子である宮廷長官エルヤキム、書記シェブナ、アサフの子である史官ヨアフは、自分たちの衣を引き裂いてヒゼキヤのもとに行き、ラブ・シャケのことばを告げた。

ヒゼキヤによる、賢い指導です。エバが、蛇に誘惑を受けた時に何をしたか、覚えていますね？蛇の言っていることに、そのまま答えてしまったのです。蛇は狡猾です。その答えによって、さらに誘導し、見事にエバをそそのかしたのです。ですから、何も言わないというのは、賢いのです。その代わりに、側近たちは悲しみと嘆きを、衣を裂くことによって示し、王に告げました。

2A けりをつける万軍の主 37

1B 脅しに苦しむヒゼキヤ 1-13

1C 祈りの要請 1-4

¹ ヒゼキヤ王はこれを聞くと衣を引き裂き、粗布を身にまとって主の宮に入った。² 彼は、宮廷長官エルヤキム、書記シェブナ、年長の祭司たちに粗布を身にまとわせて、預言者である、アモツの子イザヤのところに遣わした。

ヒゼキヤは主の宮の中に入りました。主の宮といっても、もちろん聖所の中に入っていません。そこは祭司たちの領域です。外庭まで行ったのでしょうか。そして、預言者イザヤに、先ほどの側近の内二人と、さらに祭司たちを遣わしました。イザヤに対して祈りを求めています。また主の言葉があれば語ってくれるように願っています。ヒゼキヤは知っていました、この時、祈りこそ、また主のことはこそが我々を救うのだということです。

³ 彼らはイザヤに言った。「ヒゼキヤはこう言っておられます。『今日は、苦難と懲らしめと屈辱の日です。子どもが生まれようとしているのに、それを産み出す力がないからです。』⁴ おそらく、あなたの神、主は、ラブ・シャケのことばを聞かれたことでしょう。彼の主君、アッシリアの王が、生ける神をそしるために彼を遣わしたのです。あなたの神、主は、お聞きになったそのことばをとがめられます。あなたは、まだいる残りの者のために祈りの声をあげてください。』」

ヒゼキヤは、今の心の嘆きを三つの言葉で言い表しています。「苦難」は今の現状を、有体に言っています。「懲らしめ」とは、その苦難が神から来ているものと見なしているのです。自分がエジプトに頼ってしまっているばかりに、このような苦境に陥ってしまったという悔いです。それから、「屈辱」はこの苦しみが敵から来ていることを知っているからです。

これら苦しみのとてつもない痛みを、「子どもが生まれようとしているのに、それを産み出す力がない」と言い表しています。陣痛は出産があるからこそ耐えられるものです。その痛みは一時的であり、その後に喜びがあるという希望があるからこそ、耐えられます。しかし、全くその見通しが立たない状態での痛みです。

しかしヒゼキヤは、「生ける神をそしるために彼を遣わした」という本質を見抜いていました。多くの霊の戦いにおいて、その本質を見抜くことが必須です。自分に対する攻撃の多くが、本質的に

本人が神に反抗しているためなのだ、ということです。敵は、相手と自分という対立構図を作り出そうとしますが、そうではなく神と相手という対立が本質なのです。そして、ヒゼキヤは大切な言葉を言っています、「まだいる残りの者のために」と言っています。イザヤの預言の中に数多く出てきた約束であり、残された者たちに主が救いを備えておられると彼は話しました。

そしてヒゼキヤがイザヤに祈りを要請したように、私たちも祈りを要請することは大切です。霊の戦いのために、祈りの戦士を募るのです。「エペ 6:18 あらゆる祈りと願いによって、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのために、目を覚ましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くして祈りなさい。」

2C 救いの始まり 5-7

⁵ ヒゼキヤ王の家来たちがイザヤのもとに来たとき、⁶ イザヤは彼らに言った。「あなたがたの主君にこう言いなさい。『主はこう言われる。あなたが聞いたあのことば、アッシリアの王の若い者たちがわたしをののしった、あのことばを恐れるな。⁷ 今、わたしは彼のうちに霊を置く。彼は、あるうわさを聞いて、自分の国に引き揚げる。わたしはその国で彼を剣で倒す。』」

主は、へりくだる祈りを必ず聞かれます。主はすでに事を始めてくださいます。アッシリアの王が引き揚げるように、彼に霊を置くと言われます。うわさが立って、それで引き上げるのです。主は、アッシリアの王のすべてを、このように掌握しておられるのです。

3C だめ押しをするアッシリア王 8-13

⁸ ラブ・シャケは退いて、リブナを攻めていたアッシリアの王と落ち合った。王がラキシユから移動したことを聞いていたからである。⁹ 王は、クシュの王ティルハカについて、「彼があなたと戦うために出て来ている」との知らせを聞いた。アッシリアの王はそれを聞くと、使者たちをヒゼキヤに送って言った。

当時、エジプト以上に、エジプトの南にあるクシュ(今のスーダンやエチオピア)が力を持っていました。イザヤ書 18 章で学びました、エジプト王朝のファラオには、クシュ人が付いていたような時でした。ティルハカは紀元前 701 年の時点ではまだ総督でしたが、後にファラオになります。

¹⁰「ユダの王ヒゼキヤにこう伝えよ。『おまえが信頼するおまえの神にだまされてはいけない。エルサレムはアッシリアの王の手に渡されないと断言しているが。¹¹ おまえは、アッシリアの王たちがすべての国々にしたこと、それらを絶滅させたことを確かに聞いている。それでも、おまえだけは救い出されるというのか。¹² 私の先祖は、ゴザン、ハラン、レツエフ、またテラサルにいたエデンの人々を滅ぼしたが、その国々の神々は彼らを救い出したか。¹³ ハマテの王、アルパデの王、セファルワイムの町の王、ヘナやイワの王はどこにいるか。』」

センナケリブは、直接、ヒゼキヤに手紙を送りました。そして、ラブ・シャケが伝えたことばを、直接、伝えていきます。だめ押しをしています。逆に言うと焦りがあるのです。ここが、戦いの勝負所です。私たちは、霊の戦いにおいて、攻撃が激しいと自分は劣勢に立っていると思います。いや、そうではなくて、相手が焦り、暴れていることが多いのです。終わりの日、獣の国ができます。悪魔が天から地上に投げ落とされます。それで、天において大きな声がありました。「黙示 12:12b 悪魔が自分の時が近いことを知って激しく憤り、おまえたちのところへ下ったからだ。」

2B アッシリアからの救い 14-35

1C 手紙を開くヒゼキヤ 14-20

¹⁴ ヒゼキヤは、使者の手からその手紙を受け取って読み、主の宮に上って行き、それを主の前に広げた。

ヒゼキヤは初め、イザヤに祈りを頼みました。そしてイザヤを通して主からの言葉が与えられました。それを受け入れているのですが、相手の執拗な攻撃に耐えられませんでした。そこで自分自身で主の前に出て祈ったのです。そして、それは心を注ぎだすものです。そのまま、手紙を主に読んでいただくためのものです。ある方が中傷の手紙を受け取り、祈ってほしいと頼まれたことがありました。私はヒゼキヤの祈りを思い出し、手紙を広げて、共に祈った覚えがあります。

¹⁵ ヒゼキヤは主に祈った。¹⁶「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、万軍の主よ。ただ、あなただけが、地のすべての王国の神です。あなたが天と地を造られました。」

主ご自身がどのような方を言い表すものでした。ケルビムの上に座しておられる主です。神殿には、主のおられる至聖所にケルビムがありました。天の御座のそばで主に仕えている御使いです。そして、イスラエルの神、万軍の主です。天の勢力は、この方の指揮の下に動いています。そして、地のすべての王国の神です。他の神々は、ある国の神と呼ばれていましたが、それら神々の神であられます。また、神々はしばしば天の存在全般を指すこともあります。それらの神が、主です。そして、天地を造られた方です。他の神々は造られたものです。この方だけが創造主です。

¹⁷ 主よ。御耳を傾けて聞いてください。主よ。御目を開いてご覧ください。生ける神をそしるために言ってよこしたセンナケリブのことばをみな聞いてください。¹⁸ 主よ。アッシリアの王たちが、すべての国々とその国土を廃墟としたのは事実です。¹⁹ 彼らはその神々を火に投げ込みました。彼らが神ではなく、人の手のわざ、木や石にすぎなかったのも、彼らはこれを滅ぼすことができたのです。²⁰ 私たちの神、主よ。今、私たちが彼の手から救ってください。そうすれば、地のすべての王国は、あなただけが主であることを知るでしょう。」

アッシリア王が言ったことも、半分認めています。彼らは確かに神々を粉碎していったのです。

しかし、その後が間違っています、エルサレムの神は木や石で作られたのではないからです。そのことを示してください、とお願いします。私たちも、キリストをキリストとてあがめていく、その栄光の大きさをその大きさをもって私たちが祈っているかどうか、試されます。人間の限界の中で祈るのはいけません。この方の御名にそった、栄光が現れるかたちで示してくださいと祈ります。

2C 聖なる方へのそしり 21-29

²¹ アモツの子イザヤは、ヒゼキヤのところへ人を送って言った。「イスラエルの神、主はこう言われる。『あなたはアッシリアの王センナケリブについて、わたしに祈った。』²²主が彼について語られたことばは、このとおりである。『処女である娘シオンは おまえを蔑み、おまえを嘲る。娘エルサレムは、おまえのうしろで頭を振る。

主は、祈りを聞かれています。まず、アッシリアに侵略を受けることを、凌辱されることに喩えています。そこで「処女である娘シオン」とエルサレムの住民を呼んでいます。主は彼女を守られ、アッシリアは凌辱しそこなうので、彼女がアッシリアを嘲るようにされる、ということです。こんなか弱い乙女の前に、力ある男が何もできないということで、その男が辱められるという意味です。

²³ おまえはだれをそしり、だれをののしったのか。だれに向かって声をあげ、高慢な目を上げたのか。イスラエルの聖なる者に対してだ。

アッシリアはヒゼキヤを攻撃していました。けれども、それは聖なる方に対して高慢になっていたことを示しています。ヒゼキヤが主に拠り頼んでいたからです。人は、ある者の信仰を攻撃する時に、主は、ご自身を攻撃していると受け止められます。言い方を変えれば、本人は信じる者を攻撃しているつもりですが、実は自分自身の心が、その人と共におられる神を受け入れたくない、拒みたいと思っているから攻撃しているのです。

²⁴ おまえはしもべたちを通して、主をそしって言った。「多くの戦車を率いて、私は山々の頂に、レバノンの奥深くに上って行った。そのそびえる杉の木と 美しいもみの木を切り倒し、その果ての高地、木の茂った園にまで入って行った。²⁵ 私は井戸を掘って水を飲み、足の裏で エジプトのすべての川を干上がらせた」と。

レバノンの杉、またエジプトの川は、その豊かさに威光を放っていました。それをすべて自分たちのものにしてしまうとアッシリアが豪語しています。

²⁶ おまえは聞かなかったのか。遠い昔に、わたしがそれをなし、大昔に、わたしがそれを計画し、今、それを果たしたことを。それで、おまえは城壁のある町々を荒らして 廃墟の石くれの山としたのだ。²⁷ その住民は力失せ、打ちのめされて恥を見て、野の草や青菜、育つ前に干からびる屋

根の草のようになった。

主は、すべての王国の王であります。それは、アッシリアのような強国、レバノンやエジプトを自分のものにしたような強国であっても、主ご自身がすべて掌握し、主権を持っておられるということです。しかも、主は遠い昔から、そのことをご計画されていたのです。ここが、人が高ぶる時の致命的な過ちです。自分の持っているもので、主なる神からのものではないのは、何一つないのです。すべては神から来ていて、神によって成っているのです。なので、神に栄光を帰さないと、まさに悪魔の陥った道を自分自身を歩むことになるのです。神のようになったと思いがり、それゆえに低められます。

²⁸ おまえが座るのも、出て行くのも、 おまえが入るのも、わたしはよく知っている。わたしに向かっていきり立つのも。²⁹ おまえがわたしに向かっていきり立ち、おまえの安逸がわたしの耳に届いたので、わたしはおまえの鼻に鉤輪を、口にくつわをはめ、おまえを、もと来た道に引き戻す。』

アッシリアのしていることは、すべてが知られています。そして、主はその高ぶりを裁かれるために、彼らのしたことを彼らが受けるようにされることを話されています。彼らがある征服した民を捕え移す時に、「わたしはおまえの鼻に鉤輪を、口にくつわをはめ、おまえを、もと来た道に引き戻す」ということです。これを王は、征服した民に強いらせていたことでした。自分の与えた屈辱を、彼も受けるということです。

3C エルサレムの守り 30-35

³⁰ あなたへのしるしは、こうである。『今年は、落ち穂から生えたものを食べ、二年目は、それから生えたものを食べ、三年目は、種を蒔いて刈り入れ、ぶどう畑を作ってその実を食べる。³¹ ユダの家の中の逃れの者、残された者は、下に根を張り、上に実を結ぶ。³² エルサレムから残りの者が、シオンの山から、逃れの者が出て来るからである。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。』

ここはヒゼキヤに対する言葉です。ここは、「城壁の外に出て、畑仕事ができる。そして、自分が育てたものの実を食べることができるほどの平和が戻ってくる。」ということです。種を植えて初めの収穫があるまで、三年かかります。しかし、その間も主が必ず落穂などで養ってくださるということです。回復には時間がかかりますが、必ず実を結ばせてくださいます。

ここにも、残りの者という呼び名があります。これは、神の民でも、数多くが主に背いてしましますが、その中で残りの者がへりくだり、主を信じていくという人々です。パウロは、自分たちイエスをメシアと信じる者たちを、残りの民にあてはめています。(ロマ 11:5)

³³ それゆえ、アッシリアの王について、主はこう言われる。『彼はこの都に侵入しない。また、ここに

矢を放たず、これに盾をもって迫らず、壘を築いてこれを攻めることもない。³⁴ 彼は、もと来た道を引き返し、この都には入らない——主のことば——。³⁵ わたしはこの都を守って、これを救う。わたしのために、わたしのしもべダビデのために。』』

主は、エルサレムの町を守ってくださいます。それが、主ご自身のため、またダビデのためだと言われます。主がダビデの、とこしえの都と御国を約束されたからです。ヒゼキヤは、ただ主の憐れみによって救われます。彼は敬虔な人でしたが、過ちも犯しました。しかし、彼の努力はなく、もっぱら主の憐れみによって、救われるのです。それは、主ご自身に栄光が行くためです。同じように主は私たちを守ってくださいますが、それは主が私たちを憐れみ、私たちを選ばれたからです。だから私たちが救われることによって、キリストと神に栄光が与えられるからです。

3B そしりに対する報い 36-38

³⁶ 主の使いが出て行き、アッシリアの陣営で十八万五千人を打ち殺した。人々が翌朝早く起きて見ると、なんと、彼らはみな死体となっていた。

これが初めに話しましたように、出エジプトと並んで、全世界にこの方が神であることを知らしめる大きな出来事となります。「詩 46:9-10 主は地の果てまでも戦いをやめさせる。弓をへし折り槍を断ち切り戦車を火で焼かれる。「やめよ。知れ。わたしこそ神。わたしは国々の間であがめられ地の上であがめられる。」「やめよ」という言葉が大事です、多くの人は神に逆らっています。心の中で逆らっています。そしてそれが、物理的に世界の軍隊の戦いによってこの世界はクライマックスを迎えます。しかし、主は「やめなさい、わたしこそが神であることを知りなさい。」と言われます。

³⁷ アッシリアの王センナケリブは陣をたたんで去り、帰ってニネベに住んだ。³⁸ 彼が自分の神ニスロクの神殿で拜んでいたとき、その息子たち、アデラメルクとサルエツェルは、剣で彼を打ち殺した。彼らはアララテの地へ逃れ、彼の子エサル・ハドンが代わって王となった。

これが彼に対する裁きです。あれだけ神々を倒していったと豪語しましたが、自分がアッシリアの神をあがめていた時に、息子たちによって暗殺されてしまいました。二十年後の紀元前 681 年のことです。これほど不名誉なことはありません。

イザヤが、この救いを背景にして、神の救いはどのようなものであるかを 1 章から 35 章にかけて預言していました。そして次回、38-39 章は、その後のヒゼキヤの治世を見ます。こちらは、彼の油断がきっかけになり、彼の子孫がバビロンに捕え移される預言を、これまたイザヤによって行われるという残念な出来事を読みます。そして、それが 40 章以降の預言の背景になります。